

推定形式とテンス

高山 善行

はじめに

中古語モダリティ助動詞の中で、メリ、終止ナリ（活用語終止形接続ナリ）にはテンス形式が下接することがある。⁽¹⁾しかし、その詳しい実態についてはまだ明らかにされていないようである。本稿では、まずそれらの実態について観察し、その結果をもとに推定形式の特質について考えてみたい。

一 研究史

中古語のモダリティ助動詞であるメリと終止ナリは、一般に狭義《推定》を表わすとされる。また、メリは「視覚に関わる《推定》」、終止ナリは「聴覚に関わる《推定》」を表わすと言われ、その対応が注意されている。⁽²⁾両者がム、ラム、ケムなどと一線を画する性質として、テンス形式の下接を挙げることができよう。北原保雄（一九八一）に以下のような指摘がある。

ところで、「なり（推定・伝聞）」と「めり」とは、推量の助動詞である（といわれているものである）にもかかわらず、連用形が認

推定形式とテンス

められる。ただ、その例数は僅少であり、しかも、

いとどれふなりつる雪かきたれいみじう降りけり。(源氏・末摘花)

かやうにことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。(源氏・宿木)

すすめ聞こゆる盃などをいとめやすくもてなし給ふめりつるかなと(源氏・宿木)

あま君その程までながらへ給はなむと宣ふめりき。(源氏・若菜上)

などのように、「つ」あるいは「き」が下接する例に限られ、中止法や連用法の例は全く認められないようである。したがって、大局的には、「なり(推定・伝聞)」「めり」も「む」「らむ」「けむ」「らし」「じ」などと同類の助動詞であるとみなしてよいであろうが、「つ」や「き」に上接するということは、「音が聞こえる」「目に見える」というような客体的なところが残っているからか、あるいはそのような起源的な事情が形態的に残存しているからであると解釈せざるをえないであろう。「なり(推定・伝聞)」「や」「めり」には、現代語の「らしい」のように客体の側に即した表現と主体の側に即した表現(推量表現)との二面にゆれるところがあるのかもしれない。この点については、もう少し掘り下げて考察する必要がある。(四五二頁―四五三頁)

メリ、終止ナリの性質について考える上で重要な指摘である。ここで述べられているように、「掘り下げた考察」がなされていないのが現状であって、そのために実態の観察を行なうことが第一に要請されることである。

さて、モダリティ助動詞に対するテンス形式下接の問題は、現代語の研究においても取り上げられている。仁田義雄(一九九一)ではモダリティ形式のうちテンス形式が下接するものを疑似モダリティと呼んでいる。

真の典型的なモダリティは、言表事態や発話・伝達のあり方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語的表現である。こういった「発話時における」「話し手の」といった要件を充たした心的態度の表現を「真正モダリティ」と本章では仮に呼び、この要件から外れたところを有している心的態度の表現を「疑似モダリティ」と仮称する。(五一頁―五三頁)

疑似モダリティ形式とは、真正モダリティ以外の用法を持つ形式である。つまり、形式自体が、過去になったり、否定になったり、話し手以外の心的態度に言及したりすることがあるものである。(五四頁)

「カモシレナイ」「ヨウダ」「ラシイ」「タイ」「ツモリダ」などは、いずれも、上の例文が示すように、その形式自体がタ形を取っている。したがって、これらは、もはや発話時の心的態度を表すものではない。さらに言えば、これらが表しているものは、心的態度や心的態度に関わるものであるにしても、もはや主体的な心的態度の表明そのものといったものではなく、客体化された心的態度の存在や、そういった心的態度を起こさせる客観的な世界の様相といったものへと、移っているものと思われる。(五五頁)

モダリティ助動詞にテンス形式が下接するという現象は、個別論にとどまらず、述語の階層について議論する上においても重要であろう⁽³⁾。そういう点も含めて、現代語については機会を改めて検討してみたい。

とにかく、今回検討する古典語については、まとまった記述がなされていないのが現状であって、実態を観察するところから始めなければならぬ。以下、その手順について説明する。

まず、テンス形式としては助動詞キ、ツをとりあげることにする。ツは一般にアスペクト形式として了解されているが、近過去を表しうることから、二次的にテンスの意味を表わしている。よって、今回広く考究の範囲に含めることにした。また、ケリは一般に「過去の助動詞」と呼ばれ、当然テンス形式として扱えるのだが、実際にはメリ、終止ナリに下接する確例は見られない⁽⁴⁾。結局、キもしくはツが下接する場合(以下、メリキ／ツ、ナリキ／ツと表示する)について見ていくことになるわけである。

次節では、実際にメリキ／ツ、ナリキ／ツの個々の用例を観察していくことになる。少数例の検討になるし、相互承接の微妙な問題が関わってくるから、可能な限り異文を示すことにする。(『校本枕草子』『源氏物語大成』などによる)

なお、資料としては中古初期～中期成立とされる、以下の和文文学作品を用いた。用例収集に用いた注釈書名と合わせて記しておく。『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『和泉式部日記』『蜻蛉日記』以上、日本古典文学全集(小学館)、『日本古典文学大系(岩波書店)』『紫式部日記』新日本古典文学大系(岩波書店)、『源氏物語』日本古典文学全集(小学館)、『

二 メリキ／ツの実態

メリキ／ツの用例の分布は表1のとおりである。

平安初期作品では、メリキが『平中物語』に二例生起しているだけである。メリツは用例が確認できない。つまり、用例は平安中期に集中しているのである。(ただし、『蜻蛉日記』には一例も用いられていない。) また、メリツは『源氏物語』に二例用いられているだけで、他の作品には見られない。以下、作品別に用例を見ていくことにしよう。

【平中物語】

①「いとものはかなきたよりにつけてありしことなり。その人はさだかにも知らじ。おのらも見しかば、はじめわたりの返りごとは

すめりし。その人の、ものへいましぬめりしかば、心には思ひながら、えせぬぞ。

みづからは手もいとあし、歌はた知らず。あたは、ことどもを」とぞいひける。

男が文使を介して娘に文を送る。最初は返事が来ていたが、そのうち返事が途絶えてしまい、何度も文をやるがいつこうに返事が来なくなってしまった。不審に思った男は事情を探ることにした。そこで、その娘付きの女房が返事の来ない事情を説明する場面である。「最初のうちは、代筆をする人が返事をしていた様子だった。ところが、その人がどこかへいらっしやたようで、(お嬢様としては)気になけながらも、お返事ができないのですよ。」と説明している。「おのらも見しかば」とあるように、女房があたかも自分自身の目見たかのように報告しているのである。この二例が数少ない平安初期の例で、他はすべて平安中期作品の例である。平安初期に用例が少ない

表1 作品別用例分布 (メリキ／ツ)

	メリキ	メリツ
竹取物語	0	0
伊勢物語	0	0
大和物語	0	0
平中物語	2	0
土佐日記	0	0
和泉式部日記	0	0
蜻蛉日記	0	0
枕草子	4	0
紫式部日記	3	0
源氏物語	51	2

のは、メリ、終止ナリそのものがまだ成立期にあったことによるのであろう。平安初期、『平中物語』だけに用いられた理由については明らかでないが、この作品は語法面において特殊な性格を示すことが指摘されており、さらに検討していき⁽⁵⁾たい。

【枕草子】

② さればとて、はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。たまさかには壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか。

〔説教の講師は……〕

作者が過去を回想している場面である。「自分が若い頃に聴聞に熱中したが、その頃はまだ一般の若い女性を見ることはなかった。他の女性⁽⁶⁾は、まれに、おめかしをして出かけたようだった。」という部分である。以下に校異を示しておく。能因本では「ありしか」とし、メリが使われていない。

(三) はめ

(能) ・あ・りしか

(前) ・・・・

(堺) コノ段ナシ

③ 「い。まだ上におはしましつる折からあるをば、知らざりける」とて、それより後は、局の簾うちかづきなどし給ふめりき。〔職の御曹司の西面の……〕

藤原行成との親交についての章段。行成が作者の寝起き顔をのぞき見たという事件の後で、「それより後は……」と後日談を語る。章段末尾にあって、話の締めくくりの位置に用いている。「そのとき以来、(行成が) 平気で私の部屋の簾をくぐって入り込んだりなさるようでした。」という意。

(三) .

(能) し給ふめりき

(前) コノ段ナシ

(堺) コノ段ナシ

④さてのちぞ、袖の几帳などとり捨てて、思ひなほり給ふめりし。〔頭中将のすずろなるそら言を……〕

当意即妙の答えをした作者の機知を評価して、それまで作者の悪口を言いふらしていた斉信が考えを改める話である。③と同様、「さてのちぞ、……」と時の表現を用いて後日談を語る。「後に、(斉信が)機嫌を直したようだった。」の意。前文にある「声などするをりは、袖をふたぎて、つゆ見おこせず……」と呼応している。

(三)

(能) おもひなをり給ふめりし

(前)

(堺) コノ段ナシ

⑤左衛門の陣までいきて、倒れさわぎたるもあめりしを、「かくはせぬことなり。」などくすしがる者どもあれど。聞きも入れず。〔故殿の御服のころ……〕

女房たちが大騒ぎする有様を描写的に表現している。

(三)

(能) あめりしを

(前)

(堺) コノ段ナシ

用例を見ると、②⑤は見たままを描写しているかのようで、様態性が強く顕われている。一方、③④は時の表現の存在によって回想性が強く感じられる。ちなみに、話の末尾という場所は、物語の文章においてはケリがしばしば位置する場所である。

【紫式部日記】

⑥「そこらの上達部・殿上人にさし出でて、「まばられつること」とぞ、のちに宰相の君など、口惜しがり給ふめりし。さるは。悪しくも侍らざりき。ただあはひのさめたるなり。小大輔は、紅一重ね、上に紅梅の濃き淡き五つをかさねたり。唐衣、桜。源式部は、濃きに、又、紅梅の綾ぞ着て侍るめりし。」

第一例、「のちに」で示されるように後日談として描かれている。第二例、衣装の色についての描写である。

⑦右の大臣、「和琴いとおもしろし」など、聞きはやし給ひ、ざれたまふめりしはてに、いみじきあやまちのいとほしきをこそ、見る人の身さへ冷え侍りしか。

酒の席での顕光の失態のありさまを描写的に表現している。

【源氏物語】

「メリキ」

⑧(女房)「御心地の重くならせたまひしことも、ただこの宮の御ことを、思はずに見たてまつりたまひて、人わらへにいみじ、と思すめりしを、さすがにこの御方には、かく思ふと知られたてまつらじと、ただ御心ひとつに世を恨みたまふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞こしめしふれず、ただ弱りになむ弱らせたまふめりし。うはべには、何ばかりことごとくもの深げにももてなさせたまはで、下の御心の限りなく、何ごとも思すめりしに、故宮の御戒めにさへ違ひぬることと、あいなう人の御上を思し悩みそめしなり」

と聞こえて、(総角)

メリキの連続使用が見られる部分。(第一―第四例をアーエとする)

ア 匂宮が結婚後、中の君のもとに通ってこないことを「世間体が悪い」と思う大君の心の内を推定。

イ 大君が自分の胸のうちで匂宮と中の君との仲を恨む。

ウ 大君が衰弱していく様態を描写。

エ 大君がどこまでもつきつめて考えていくという心の内を推定している。「うはべには」という様態表現との対比が明瞭である。

イ、ウはメリのない本文がある。エはベカメリキ、ベカメリとするものがある。(異文のない場合は×で示す。以下同じ)

ア

(青) ×

(河) ×

(別) ×

イ

(青) ×

(河) ×

(別) 給めりし——給し横陽

ウ

(青) ×

(河) ×

(別) 給めりし——給し平

エ

(青) ×

(河) ×

(別) おほすめりしに——おほすへかめりしに陽——おほすへかめるに平

⑨七月にぞ后たまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。(紅葉賀)

地の文の用例である。藤壺立後の場面。文体については後述するが、メリキ／ツは『源氏物語』で地の文で用いられることが少ない。しかも、この文の位置は段落の冒頭部分で、③④と同様にケリが使われてよきそうな場所である。全集本注「重大な公事なので『めりし』と婉曲に叙する」古典集成注「物語作者として重大な国事に関する記述を遠慮して、ほかした書き方」とするが、他にどのような類例があるか知りたいところである。

(青) きさきみ給めりし——きさきにゐたまふめりし横——きさきにみ給めりしを陽

(河) ×

(別) ×

〔メリツ〕

⑩母君「……身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、交らひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、……」(桐壺)

桐壺更衣の母が命婦に向かって、娘(桐壺更衣)の死に至る経緯について語る場面。母が更衣の他者との付き合い方を推定的に述べている。異文について。ツのないもの、ツのかわりにキを用いているものがある。《過去》という時のばに對する解釈の揺れを表わしているであろう。

(青) 給ふめりつるを——給めるを肖三

(河) 給ふめりつるを——たまふめりしを河

(別) 給ふめりつるを——給めりしを御国表——ナシ陽

⑪君は入りて臥したまひて、「……、これかれ、灯明かくかかげて、すすめきこゆる盃などを、いとめやすくもてなしたまふめりつるかな」と、宮の御ありさまをめやすく思ひ出でたてまつりたまふ。(宿木)

薫が匂宮の新婚第三夜の儀(披露の祝宴)の様子を回想する。

(青) ×

(河) もてなし給めりつるかなと——もてなし給めりつるなど大

(別) ×

以上で個々の用例の観察を終わる。次に、これらの用例を通してみた、メリキ／ツの統語的特徴、意味的特徴、文体的特徴について考えてみたい。

〔統語的特徴〕

まず、メリキ／ツの上接語について見てみることにする。表2を参照されたい。

上接語として目立つのは、「思す系」をはじめ、「思考・感情」を表わすものが多いことである。これは、メリの上接語の一般的な傾向とは異なるものである。メリの上接語としては、ラ変型活用語が多いことが指摘されており、とりわけ助動詞ナリ(断定)が多い⁽⁶⁾という。ところが、メリキ／ツにナリが上接した例は一つもないのである。(その理由については後述。)

次に下接語についてみると、接続助詞が多いことに気付く。つまり、従属節(この場合は接続節)での用法が多いということである。そこで、メリキ／ツを大きく文中用法と文末用法に分けて分布を調べてみた。(表3参照)

表2 メリキ／ツの上接語

『平中物語』	
(返りごとを) す	1
(ものへ) います	1
『枕草子』	
(化粧じて) あり	1
(うちかづき) す	1
思ひなほる	1
(倒れさわぎたるも) あり	1
『紫式部日記』	
惜しがりたまふ	1
(紅海の綾ぞ) 着てはべる	1
ざれたまふ	1
『源氏物語』	
思す系※	16
思ふ	4
心+動詞※	4
嘆く	2
恨む	1
恋ふ	1
定む	2
以上、思考、感情系動詞	
のたまふ	2
言ふ	1
聞こゆ	2
咎めきこゆ	1
申したまふ	1
御覧ず	1
弱る	1
ゐる	1
紛る	1
いそぐ	1
いましむ	1
(住い) す	1
慰めかぬ	1
萎えはむ	1
(文通) す	1
(事) そぐ	1

※思す系……思し嘆く、思しおく、思し寄る、思しわたるなど。

※心+動詞…心寄す、心覚む、心おく

表3 文中用法と文末用法

『平中物語』	文中	1
	文末	1
『枕草子』	文中	1
	文末	3
『紫式部日記』	文中	1
	文末	2
『源氏物語』	文中	38
	文末	13

傾向としては、文中用法が多く、文末用法が少ないことがわかる。これは、キが文中用法が多いことによるのであろう。文末用法は、単に終止形終止する例がほとんどなく、係り結び、連体止めなど、曲調終止する例が多い。終助詞がほとんど下接しないのは、そもそも終助詞が係助詞の結びになりにくいためであらう。

〔意味的特徴〕

メリキ／ツの対象となる事態は大きく二つに分かれる。

一つは、人の具体例な動作、外見を描写するもので、様態性、描写性が濃厚なタイプである。たとえば、⑥⑧ウのような例である。もちろん、名詞を使つての語彙的手段による《様態》の表現とはレベルが異なる。⁽¹⁾

もう一つは、特に『源氏物語』で多く見られるものだが、人の動作、外見などを根拠として、『思考』『感情』といったその人の心的内容を推定するものである。たとえば、⑧ア、イ、エのような例である。これは、推定性が濃厚なタイプと言えよう。どちらのタイプも視覚でとらえられる事態に関わつてはいるが、後者の方がモダリティ助動詞らしい用法と言えよう。用例の割合としても圧倒的に後者が多い。

表4 文体別用例分布

	平 中 物 語				枕 草 子				紫 式 部 日 記				源 氏 物 語			
	会	心	地	他	会	心	地	他	会	心	地	他	会	心	地	他
メリキ	2						4				3		36	10	3	2
メリツ													1	1		

使用場面としては、身分的に下位の者が上位の者に「報告する」場面が目立つ。この問題は文体的特徴に深く関わってくる。典型的なものは、先の⑧のような例で、女房が大臣のありさまを薫に報告している。
 なお、『婉曲』については、定義の問題などいろいろ検討すべきことが多く、今回は立ち入らない。⁽⁸⁾

〔文体的特徴〕

文体別の用例分布については表4を参照されたい。

大まかな傾向としては、メリ一般の特徴と差が無いと言える。表4より、日記・随筆では地の文のみに用いられ、会話文・心話文は用例が見られない。一方、『源氏物語』では会話・心話が多く、地の文が少ない。物語は地の文では、ケリという「語り」の形式が選択されるため、キが入る余地がない。よって、メリキも排除される。一方、キを基調として述べられる随筆・日記類では、地の文にそういった制約がかららない。ジャンルによって、分布が異なる背景にはこのような事情があったのではないかと推測される。また、通時的に見れば、秋本守英（一九七四）が指摘するように、平安初期作品から中期にかけての文体の変容とメリ使用との相関を想定する必要がある。

三 ナリキ／ツの実態

ナリキ／ツの用例分布は表5参照。

【枕草子】

⑫掃部司まゐりて、御格子まゐる。主殿の女官御きよめなどにまゐりて、起きさせ給へるに、花もなければ、「あな、あさまし。あの花どもはいづち往ぬるぞ」と仰せらる。（中宮）「あかつきに、『花盗人あり』といふなりつるを、なほ枝などすこしとるにやとこそ聞きつれ。誰がしつるぞ、見つや」と仰せらる。

表5 作品別用例分布 (ナリキ/ツ)

	ナリキ	ナリツ
竹取物語	0	0
伊勢物語	0	0
大和物語	0	0
平中物語	0	0
土佐日記	0	0
和泉式部物語	0	0
蜻蛉日記	0	0
枕草子	1	1
紫式部日記	2	1
源氏物語	5	1

中宮が朝起きてみると、庭にあるはずの造花がないことに気付く場面。「早朝に『花盗人がいる』という声を聞いたけれど、枝を少し盗っていったくらいに聞いた。誰が盗ったのですか、誰が見ましたか」という意。実際に声を聞いたことに対して用いている。ツは近過去を表している。この部分の中宮の会話は文末ツが基調となっている。なお、前田家本では終止ナリがなく、単に「いひつるは」としている。

(三) にはな . を

(能) あか月・・ぬすむ人あり・といふなりつるは

(前) にはな つ ひ・

(堺) コノ段ナシ

⑬(中宮)「その女出で来て、いみじう手をすりていひけれども、『仰せごとにて。かの里より来たらん人に、かく聞かすな。さらば、屋うちこぼたん』などいひて、左近の司の南の築土などに、みな棄ててけり。『いと堅くて、おほくなんありつる』などぞいふなりしかば、げに二十日も待ちつけてまし。今年の初雪も降り添ひなましなどいふ。

雪山が残るかどうかの賭けをする話。中宮が清少納言に対して『雪がたいそう堅くて量が多い』と侍たちが言っていたようだから、二十日までももっただろう』と語る場面。

(三) るなそ

(能) いとたかくておほくなんありつ・・と・いふなりしかは

(前) コノ段ナシ

(堺) コノ段ナシ

【紫式部日記】

⑭右の宰相中将の、あるべきかぎりはみなしたり。樋洗のふたりととのひたるさまぞ、「さとびたり」と、人ほほゑむなりし。
五節の舞姫が参入する場面。右の宰相中将（藤原兼隆）の方はなすべきことがすべて整っている。樋洗の童女が二人そろって畏まっている様子を、「田舎びている」と人々が笑っている、という意。⁽⁹⁾

⑮女の声にて、「いづこより入りきつる」と問ふなりつるは、「女御殿の」と、うたがひなくおもふなるべし。

かつてわがもの顔に振る舞っていた左京のところへあたかも弘徽殿女御方から出したように偽って手紙を送る場面。女の声で「どこから入ってきたの」と尋ねていることから、「女御方からの手紙だ」と疑いもなく思い込んでいたようだが、という意。

⑯夜さりの御湯殿とても、さまばかりしきりてまゐる。儀式おなじ。御書の博士ばかりやかはりけむ。伊勢守致時の博士とか。例の孝経なるべし。又、挙周は、史記文帝の巻をぞよむなりし。七日の程、かはるがはる。

湯殿の儀式を回想する場面。周辺にケム、ナルベシといった推量表現が目立つ。⁽¹⁰⁾

【源氏物語】

ナリキの用例は後半の巻に集中している。（ただし、ナリツはこの限りではない）

⑰（玉鬘）「故宮（『螢兵部卿宮』亡せたまひて、ほどもなくこの大臣（『紅梅右大臣』の（真木柱ノモトニ）通ひたまひしことを、いとあはつけいやうに世人はもどくなりしかど、思ひも消えず、かくてもものしたまふも、さすがさる方にめやすかりけり。定めなの世や。いづれにかよるべき」などのたまふ。（竹河）

玉鬘の発話。「世間の人は非難していたようだけれど」の意。積極的に対話とみなせる根拠はなく、独話ともみなしうる。別本にナリとケリ、メリが交替した本文がある。

(青)×

(河)×

(別) もとくなりしかと——もときけれと西——もとくめりしかと保——もとくめりしを国

⑮(中の君)「いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうしもありけるにかあらん。故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし。故姫君(『大君』は宮(『八の宮』の御方さまに、我は母上に似たてまつりたるところは、古人ども言ふなりしか。げに似たる人はいみじきものなりけり」と思しくらぶるに、涙ぐみて見たまふ。(東屋)

中の君の心話(浮舟についての感想)。「姉は父(八の宮)に、自分は母に似ている」と老人たちが言うようだったという意。ナリとメリが交替した本文がある。

(青)×

(河) いふなりしか——いふめりしか河

(別) いふなりしか——いふめりしか御宮陽保国——いふなりし池

⑯(浮舟の母君)……鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん、いと昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。(蜻蛉)

浮舟の母の心話。「昔物語でこう言う」という述べ方である。カ結びはこの例のみで終止ナリとしてはめずらしい。「ほんに昔物語の不思議な魔性のもののしわざの話だったか、そんなことも言っていたようだ。」(集成本訳)

(青)×

(河)×

(別)×

⑳(僧都)「あやしく。かかる(浮舟ノ)容貌ありさまを、などで身をいとはしく思ひはじめたまひけん。物の怪もさこそ言ふなりしか」と思ひあはするに、……(手習)

僧都の心話。「物の怪もそのようなことを言っていたようだった。」の意。⁽¹¹⁾

(青) いふなりしかと——いふなりしかと二——いふなりしかはと肖

(河) ×

(別) さこそいふなりしかと——いふなりしもさそあなりしと保

㉑(小宰相の君)「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる。いみじうわづらひしほどにも、見る人惜しみてせざりしを、正身の本意深きよしを言ひてなりぬる、とこそはべるなりしか」と言ふ。(手習)

小宰相の会話、上接語「はべり」は異例。

(青) 侍なりしか——侍しか榊——はへなりしか三

(河) ×

(別) 侍なりしかと——侍しかと宮池国阿桃——うちはへなりしか——陽

次にナリツの例を挙げる。

㉒いよいよあやしく、ひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。いとど、愁ふなりつる雪、かききたいじう降りけり。空の気色はげしう、風吹きあれて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。(末摘花)

女房が寒さを愁う場面を受けている。⁽¹²⁾『源氏物語』でナリツはこの一例のみ。

(青) ×

表 6 ナリキ／ツの上接語

『枕草子』	
言ふ	2
『紫式部日記』	
ほほゑむ	1
問ふ	1
読む	1
『源氏物語』	
言ふ	3
もどく	1
はべり	1

表 7 文中用法と文末用法

『枕草子』	文中	2
	文末	0
『紫式部日記』	文中	1
	文末	2
『源氏物語』	文中	1
	文末	4

(河) うれふなりつる——うれへなりつるに七宮尾大鳳——うれえなりつるも平
 (別) うれふなりつる——うれう(へ)なりゆ(つ)るに御

以下前節と同様に、統語的特徴、意味的特徴、文体的特徴の三点について述べてみたい。

〔統語的特徴〕

まず、上接語について調べてみよう。表 6 を参照されたい。

この表から明らかのように、上接語にははっきりした特徴が見られる。それは、発話動詞に限られるということである。ただし、「もどく」の原義は《まねをする》だが、この場合は《非難する》の意で用いられているので、発話動詞に準じて扱うことにする。

文中用法と文末用法に分けてみると、メリキとは違って文末用法が多い。また、曲調終止が徹底しており、ナリキという形で終止した例は見当たらなかった。

〔意味的特徴〕

通常、終止ナリは、音声にかかわる事態に広く用いられるが、ナリキ／ツは上接語が発話動詞に限られるということから、
 ○○が「××××」と言うようだった。

のように《伝聞》（広義）の意になる。「噂」「言い伝え」といった漠然としたもの（⑬⑭）と、⑬⑭のように実際に具体的な発話を聞いたとするものがある。

現代語の典型的な伝聞形式ソウダは通常テンス形式が下接しないが、終止ナリはテンス形式が下接しうるから、同じく伝聞形式とは言っても、性質が異なるようである。^⑭ 典型的な伝聞形式とはなりきっておらず、現代語のヨウダ、ラシイと同様に様態性と未分化の段階にあるのではなからうか。現代語、古代語の《伝聞》については、プロトタイプと周辺という観点から、種々のものを整理していく必要がある。

〔文体的特徴〕

文体的特徴については表8を参照されたい。

ナリキ／ツのジャンルによる使用文体の違いとしては、物語の地の文に用いられにくいことと、日記・随筆の心話文に用いられていないことくらいである。ただし、メリキ／ツの場合とは違って、用例数そのものが少なく、本文の異同も多いので確かなことは言いにくい。メリキ／ツという承接からの類推によって成立した可能性も考えられよう。

四 まとめ

以上の実態をもとに、メリキ／ツ、ナリキ／ツという承接が果たす役割と意義について述べる。

表8 文体別用例分布

	枕 草 子				紫 式 部 日 記				源 氏 物 語			
	会	心	地	他	会	心	地	他	会	心	地	他
ナリキ	1						2		2	3		
ナリツ	1						1				1	

先に述べたように、メリキ／ツ、ナリキ／ツは《報告する》という場面での使用が目立つ。ここで典型的な「報告」の場面について考えてみよう。《報告する》という発話行為がなされるとき、先に見た例の範囲においては、人の情報に関わるものが通常であった。しかも、そこでの事態は人の状態だけではなく、心的内容に関わってくるものであった。金水敏（一九八九）の述べるように、現代語の《報告する》文法においては、他者の心的状態を直接形で表現することはできず、何らかのモダリティ助動詞を付加して間接形にして表現する必要がある。⁽¹⁵⁾

（太郎の近況について報告する場面）

？太郎は「悲しい」と思っていたよ。

太郎は「悲しい」と思っていたらしいよ／ようだよ。

おそらく古典語でも事情はかわらないものと思われる。ただし、間接形を作る上で選択されるモダリティ助動詞はどれでもよいというわけではなく、いくつかの条件が満たされている必要がある。

条件の一つは、「《過去》を表わすことができる」ということである。《報告する》という発話行為は過去の事態について語ることになるので、これは当然のことである。では、モダリティ助動詞の中でどれが条件を満たすだろうか。今回取り上げたメリ、終止ナリは言うまでもないが、《過去》を表わすだけならケム、ラム（ツラムの形）も可能であろう。

しかし、条件はこれだけではない。もう一つの条件は、「事態をできるだけ忠実に再現することができる」ということである。たとえば、事件の実写フィルムのようなものである。報告者のビデオカメラが事件を撮影して、それを持ち帰って被報告者に上映して見せる。それと同様に、報告の表現とは、生々しく実際に起こった事態になるべく近づけたリアルな表現でなければならない。裏を返せば、なるべく報告者の主観的判断の色合い（たとえば事態の解釈など）を消し去ることが必要である。事件に対するコメントは必要とされていないのである。

さて、ここでモダリティ助動詞の選択について考えると、ケム、ラムは主観の色が出過ぎてしまい、この条件を満たすことができない。そこで、メリ、終止ナリが選択される。それらが上接語でナリ（断定）をとらないのは、ナリ（断定）の機能によって報告者の「推論」と

いう意味が卓越し、結果的に主観的判断の色合いが濃厚に出てしまうからであろう。⁽¹⁶⁾

このように考えると、メリ、終止ナリはその描写性によって、『報告する』という発話行為に適応しやすい形式であったと思われる。推定形式+テンスという表現が用いられる必然性はそのあたりにあるのではなからうか。主に文体的側面からの要請によって成立した承接であると思われるのである。先に指摘した使用文体の偏り（日記・随筆は地の文、物語では会話文・心話文に多い）については、今後それぞれの文体そのものを「報告性」の面から分析してみる必要があるだろう。

おわりに

本稿では、メリ、終止ナリにテンス形式が下接する現象を観察し、その特徴について述べた。実態の観察が中心であったために、個々の現象については、問題提起にとどまる部分が少なくない。現代語の疑似モダリティ形式との対照、伝聞表現の整理など、残された課題については稿を改めて検討したい。

注

- (1) 中古語のモダリティ助動詞については高山善行（一九九二）参照。
- (2) こうした把握は語源説の影響が強いと思われるが、このような単純な対立をなすかどうか疑わしい。
- (3) 金子弘（一九八九）など文体的観点からの研究も興味深い。
- (4) メリケリは『源氏物語』に存疑の例が一例ある。
- (5) 阪倉篤義（一九九三）など参照。
- (6) 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』（学燈社）におけるメリの項目（吉田金彦氏担当）参照。
- (7) 『様態』を表わす語彙については、渡辺実（一九八二）参照。
- (8) 『婉曲』については、他の助動詞の問題も合わせていずれ検討してみたい。
- (9) 「ほほゑむなりし」を「ほほえみたりし」とする本文がある。
- (10) 「よむなりし」を「よむなるへし」とする本文があるが、ゾの結びになっており、疑問が残る。

- (11) (物の怪)「この人は、心と世を恨みたまひて、われいかで死なむ、といふことを、夜昼のたまひしにたよりを得て……」(手習)を受ける。
- (12) (女房)「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にも逢ふものなりけり」(末摘花)を受ける。
- (13) ソウダッタが《伝聞》を表わす実例についてはまだ見いだしていない。
- (14) 森山卓郎(一九九五)参照。森山論文は現代語の《伝聞》の問題について初めて正面から扱ったもので学ぶところが多い。
- (15) 「直接形」「間接形」の区別は神尾昭雄(一九九〇)による。なお、柴田敏(一九九五)は「情報のなわ張り理論」を用いて、メリと終止ナリの使い分けを分析しており、注目される。
- (16) ナリの機能によって断定のスコープが拡大することによる。

参考文献

- 松山陽子(一九六七)「中古文学における助動詞『めり』」(『藤女子大学国文学雑誌』一一)
- 秋本守英(一九七四)「助動詞『めり』の文章史的考察」(『国文学論叢』一九)
- 北原保雄(一九八一)『日本語助動詞の研究』(大修館書店)
- 渡辺 実(一九八二)「語彙と文体」(『講座日本語の語彙①』明治書院)
- 黒田徹・宇田川義明(一九八八)「『らしい』『ようだ』は『だろう』と違う——『夏の花』『雪国』を具体例として——」(『解釈と鑑賞』第五三巻七号)
- 金子 弘(一九八九)「動詞+ラシカッタという言い方めぐって——会話文・地の文の別と文法カテゴリーの順序——」(『山形女子短期大学紀要』二二集)
- 金水 敏(一九八九)「報告」についての覚書」(『日本語のモダリティ』くろしお出版)
- 神尾昭雄(一九九〇)『情報のなわ張り理論』(大修館書店)
- 仁田義雄(一九九二)『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
- 丹羽哲也(一九九二)「過去形と叙述の視点」(『国語国文』六一巻九号)
- 野田尚史(一九九二)「テンスから見た日本語の文体」(『文化言語学——その提言と建設——』三省堂)
- 高山善行(一九九二)「中古語モダリティの階層構造——助動詞の意味組織をめざして——」(大阪大学『語文』第五八輯)
- 阪倉篤義(一九九三)『日本語表現の流れ』(岩波書店)
- 柴田 敏(一九九四)「ナリとナメリの〈判断〉について」(『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂)
- (一九九五)「助動詞メリとナリへ終止形接続」との使い分けについて」(『静岡英和女学院短期大学紀要』第二七号)
- 森山卓郎(一九九五)「伝聞」考」(『京都教育大学国文学会誌』二六)

付記 再校の段階で加藤浩司「上接語の相違から見た助動詞キ・ケリの差異」(国語学会平成八年度秋季大会要旨)が管見に入った。メリキ、ナリキが「報告する表現」で用いられるという興味深い指摘があり、本稿での観察と一致するものである。